

編集後記：この春には気象庁の予報業務システムが大幅に更新されるそうです。全世界から集められた膨大なデータが取り込まれる最新の予報モデルからは、大気の流れや熱的構造、降水に関する力学的に整合性の取れた膨大なデータが産み出されます。これらのデータは民間で予報事業に携わる方々にとっても勿論必須のものでしょうが、研究者にとっても宝の山といえるほど貴重なものです。特に、数値予報モデルの初期値として使われる客観解析データは、長期間蓄積されれば、大気循環の遍歴を記録した貴重なデータとなります。今後は海洋循環の客観解析データの蓄積も徐々に進んで行くでしょう。そしてこれらは、人工衛星からの遠隔計測データと併せて、地球の気候システムの解

明に向けた研究推進のために不可欠な情報を我々に与えてくれるに違いありません。

ただ、モデルが高精度化するに連れ、産み出されるデータ量も肥大化します。今後ますます高精度化し、多角化するであろう人工衛星からの遠隔計測についても同様です。データセットの維持管理にもそれなりの物的・人的な資源が必要になります。気象庁が豊富な手持ちデータの公開を前向きに検討中との風聞も耳にします。どのデータをどんな形で公開して欲しいのか、それに対し我々がどう協力して行くのか、学会から気象庁への具体的な働き掛けが今求められていると思います。(中村 尚)

訂 正

43巻2月号135ページ、日本気象学会教育と普及委員会編「教養の気象学」の改訂作業開始のお知らせの各章のタイトル(一部仮題)と著者名(敬称略)第7章の記述の中で、「東北大 木村富士男」を「筑波大学 木村富士男」と訂正させていただきます。
